

## 北東北と南東北の研究合流

片岡龍（東北大学）

2016年12月2日（金）、3日（土）の二日間、北原かな子さん（青森中央学院大学）を研究代表とする科学研究費プロジェクト「近代移行期における「音」と「音楽」ーグローバル化する地域文化の連続と変容」と、わたしを含む南東北の研究者が中心となって運営している「東アジア〈霊性〉・〈平和〉研究会」との合同シンポジウムが開催された。

開催の経緯は、2016年7月22日（金）第五回「東アジア〈霊性〉・〈平和〉研究会」において、北原さんに上記科研プロジェクトに関わる報告をしていただいたことに端を発する。

北原科研プロジェクトと東アジア〈霊性〉・〈平和〉研究会との橋渡しをしてくれたのは、同プロジェクトメンバー、かつ東北大学文学研究科日本思想史研究室出身の鈴木啓孝さん（韓国・東義大学）で、7月の際にも話をしていた。

その7月の研究会の懇親会で、合同シンポジウムをしようという話が盛り上がり、それぞれの研究をつなぐ可能性として、仙台藩士が中心となって布教されたハリストス正教が、一つの共同研究課題として浮かび上がった。

12月の合同シンポでは、初日のテーマをハリストス正教とし、北原科研メンバーの山下須美礼さん（帝京大学）の報告にたいして東アジア〈霊性〉・〈平和〉研究会メンバーの高橋原さん（東北大学）がコメントを、また東アジア〈霊性〉・〈平和〉研究会メンバーの中野優子さん（東北大学・院）、片岡龍（東北大学）の報告にたいして、北原さん、山下さんがそれぞれコメントをして、相互交流を深めた。

二日目はハリストス正教に限らず、音楽や言語という観点と霊性との結びつきに関して、鈴木さんの報告にたいして森川多聞さん（東北大学）のコメントが、東アジア〈霊性〉・〈平和〉研究会メンバーの高棹健太さん（東北大学・院）の報告にたいして北原科研メンバーの浪川健治さん（筑波大学）のコメントがなされ、最後に東アジア〈霊性〉・〈平和〉研究会メンバーの松谷基和さん（東北学院大学）の司会で全体討論が行われた。

北原科研プロジェクトは南奥羽地域の近代移行期の社会と文化をグローバルな観点から捉え直そうとするものであり、一方、東アジア〈霊性〉・〈平和〉研究会のメンバーは仙台や福島などの南東北に在住し同地域の近代の宗教的諸相を今東アジアという観点から見直すことに関心があるという点で、今回の合同シンポジウムは、まさに「東北」社会の文化・宗教の個性的展開から、「日本」という国民国家の枠組みに規定された視点を相対化する試みであったと言える。

今後も引き続き合同研究を進めることで、「東北」という磁場から、東アジア、世界に、新たな人間社会の可能性を発信できるよう努めたい。

## 〈靈性〉・〈平和〉研究会とのコラボに寄せて

北原かな子（青森中央学院大学）

今回のシンポジウムでは、筆者が代表を務める科研グループから山下須美礼氏と鈴木啓孝氏が発表の機会をいただいた。この科研のタイトルは「近代移行期における「音」と「音楽」ーグローバル化する地域文化の連続と変容ー」（基盤研究（B）課題番号 15H03232、2015-2018）で、幕末から明治にかけて北奥羽地域を対象として、民衆レベルの「音」や武士階級の「楽」など、音楽に関わる諸相に注目し、移行期の社会と文化について、グローバル化の視点も加えて考察するものである。音に関わる感性の視点から、歴史の中の人間像の変化を分析・総合する複合的文化論を目指しており、社会体制変化の背景にある文化の連続と断絶について考察することを最終目的にしている。

この研究構想の中で、山下氏は函館開港の影響下にあった北奥地域におけるグローバル化の問題に取り組んでおり、今回の発表「北東北における東方正教の展開ー近代移行期の士族と地域社会ー」では、藩政期に在地の藩士であった士族たちが、戊辰戦争の敗戦後も地域社会に留まりながら、どのように新しい時代に対応しようとしたのか、彼らが受け入れたキリスト教（東方正教）との関わりから読み解こうとしたものであった。山下発表においては、仙台藩士を中心として旧仙台藩領や旧南部藩領に東方正教が広がっていく経緯や、地域社会において支配層・知識層であった士族がキリスト教に接近したことの意味、あるいはその影響について明らかにされた。またその発表に対し、東方正教を受け入れた日本人信徒の教義理解の深度についてどのように考えるかなど、日本におけるキリスト教受容の本質的な部分を問う活発な討論が展開された。

また鈴木氏は、科研の中で藩政期における武士階級の音楽的な素養が近代にどう影響を与えたかという問題について担当している。今回の発表「伝統芸能者の「遺言」から読み解く明治ナショナリズムの転回ー平曲家・館山漸之進による二つの「情願書」を素材に」では、東京芸術大学に残されている弘前藩士族館山漸之進による平曲保存の「情願書」を紹介しつつ、その「情願書」が書かれた背景も含めた近代における平曲の伝承や、明治後期の邦楽復興運動の思想史的意義など、伝統音楽と武士階級をめぐる諸相について明らかにされた。

鈴木氏による武士階級と邦楽伝承、山下氏による武士階級と東方正教は、それぞれ音楽、あるいは宗教が中心であり、双方とも〈靈性〉とも深く結びつくテーマである。その点において〈靈性〉・〈平和〉研究会との連携は、本科研チームにとってもきわめて有意義であり、今後はディスカッションの機会をもち、議論を深めることにより、より大きな成果につなげていきたいと願っている。